

[研究ノート]

ポリーヌ・ヴィアルド-ガルシアの音楽活動に関する 研究資料について

水越美和

1. はじめに

本稿は、19世紀の音楽に多大な影響を及ぼしたとされるメゾソプラノ歌手、作曲家、声楽教師ポリーヌ・ミシェル・フェルディナンド・ヴィアルド-ガルシア Pauline Michelle Ferdinande Viardot-García (1821年パリ生・1910年パリ没) についての資料を整理し、その多岐にわたる音楽活動に対する研究の方向について考察することを目的とする。

ポリーヌ・ヴィアルド (以下ポリーヌと記す) の、オペラ歌手としての業績のうち、最も顕著なものは1849年初演のジャコモ・マイヤーベーア Giacomo Meyerbeer (1791-1864) 《予言者 *Le Prophète*》と1859年のエクトル・ベルリオズ Hector Berlioz (1803-69) 編曲によるクリストフ・ヴィリバルト・グルック Christoph Willibald Ritter von Gluck (1714-1787) 《オルフェオとエウリディーチェ *Orfeo ed Euridice*》の復活上演を大成功に導いたことである。前者によって「近代メゾソプラノの原型を確立」(Pleasants 1966)、後者においては「演技力ある知的なスター歌手とのコラボレーション」と評されている (Sternfeld 1965)。舞台を引退してからの後半生は作曲と教育、サロンの運営に力を注ぎ、19世紀前半から20世紀初頭に至る数多くの音楽家や芸術家との交流を通して同時代の音楽にさまざまな形で関わり続けた。近年になって、新たな資料の出版が相次ぎ、没後100年を記念した演奏会も開催される等注目を浴びるようになったが、ポリーヌの音楽活動に対する研究はまだ少ないのが現状である。

2. ポリーヌ研究資料について

これまでに筆者が確認することができたポリーヌの音楽活動に関する研究資料について、資料の性質に基づいて以下の2.1から2.5に分類、整理して述べる。

2.1. 伝記、回想等

英語で記述された伝記は3点挙げられ、ポリーヌの活躍の場のひとつであったイギリスで出版されている。まず *The Price of Genius* (FITZLYON 1964) は、初めて出版されたポリーヌの本格的な伝記で、オペラ歌手としての名声以外当時あまり知られていなかった、同時代の芸術家との交流についての豊富で詳細な記述からポリーヌの人間像が浮かび上がってくる。2巻のうちの上巻として出版され、オペラ歌手時代の情報が豊富な *The Life and Work of Pauline Viardot Garcia, Vol. I* (KENDALL-DAVIES 2003) は、著者自身の演奏によるポリーヌの歌曲が収められたCDが付されているのが特徴的である。*Enchantress of Nations* (STEEN 2007) は、当時の社会背景、例えば当時急速に発達した科学技術による輸送・通信手段、また舞台の報酬や通貨の価値といった、

ポリーヌを取り巻く周囲の状況についても解説が付され、より視野の広い研究がなされている。他に英語で書かれたものでは、独立した伝記ではないが *Great Singers* (FERRIS 1881) は小規模ながらポリーヌ存命中に出版された評伝の一例として興味深い。本国フランスで出版された伝記は *Pauline Viardot* (BARRY 1990)、*Pauline Viardot Biographie* (BARBIER 2009) の2点が挙げられる。これらと別に *Pauline Viardot au miroir de sa correspondance* (FRIANG 2008) は書簡集ではあるが、書簡を通して構成された伝記となっている。またポリーヌの業績のひとつとしてロシアの音楽を西欧に伝える重要な役割を果たしたことが知られており、ロシア文学とも関係も深かったためか、ロシアでも *Polina Viardo-Garsia* (ROZANOV 1969)、*Prizrak Viarda ili Nesostoyavsheesya shaste Ivana Turgeneva* (MOLEVA 2008) の2点が出版されている。一方、歌手としてたびたび帰国し、引退後しばらく移り住んだドイツにおいて出版あるいはドイツ語で書かれたものは、特定の人物や地域との関わりを中心に扱った *Die Liebe eines Lebens* (ALJA 1952) と *Pauline Viardot in Baden-Baden und Karlsruhe* (LANGE-BRACHMANN et al. 1999) のみである。なお、ポリーヌの生涯についての日本語でのまとまった記述は、音楽事典の類を除くと、『女性作曲家列伝』(小林 1999) のみであるが、ポリーヌの訃報を森鷗外が報じていることなどが新たに付記されており、おそらく初めてポリーヌが日本に紹介されたエピソードとして興味深い。

他に、*America's Musical Inheritance* (SHCOEN-RENÉ 1941) はポリーヌの弟子による回想録だが、歌唱法に関するエピソードが多く、歌手として、特に声楽教師としてのポリーヌを知ることができる資料である。また、ポリーヌの兄でバリトン歌手、声楽教師マヌエル・ガルシア Manuel Patricio Rodríguez García (1805-1906) の著作 *Hints on singing* (GARCÍA 1894) や、ポリーヌの4人の子供たちのうち音楽家となった長女ルーズ Luise Héritte-Viardot (1841-1918) の自伝 *Memories and Adventures* (HÉRITTE-VIARDOT 1977) と、末子ポール Paul Viardot (1857-1941) の自伝 *Souvenirs d'un artiste* (VIARDOT 1910) から、新たな視点からの手掛かりが得られるであろう。

2.2 書簡

ポリーヌ没後、最初に公に発表された書簡、“Pauline Viardot-Garcia to Julius Rietz” (VIARDOT 1915) において、ドイツの音楽家ユリウス・リーツ Julius Rietz (1812-1877) 宛の手紙からポリーヌの音楽観を読み取ることができる。その後わずかではあるがリヒャルト・ワーグナー Richard Wagner (1813-83) からポリーヌに宛てられた手紙についての報告、“Letters from Wagner to Madame Pauline Viardot” (CRAIG 1927) がある。まとまった形で出版された書簡集としてはジョルジュ・サンド George Sand (1804-76) との文通 *Lettres inédites de George Sand et de Pauline Viardot* (MARIX-SPIRE 1959)、イワン・ツルゲーネフ Ivan Turgenev (1818-83) からの手紙 *Lettres inédites de Tourguéniev à Pauline Viardot et à sa famille* (GRANJARD et al. 1972) などが際立っているが、ポリーヌが文学にも精通していたことの現れであろうか。パリ

一ヌを中心に据えたさまざまな人物との書簡集としては前項 2.1 で挙げた *Pauline Viardot au miroir de sa correspondance* (FRIANG 2008) のみである。

2.3 ポリーヌ自身の作品、著作

パリ音楽院で、ベルリオーズと同じ師アントワーヌ・レイハ Antoine Reicha (1770-1836) に作曲を学んだポリーヌは、歌手として活躍していたころから作曲や編曲も手がけており、歌曲だけでも 100 曲を上回る作品が残っている。独唱、重唱、合唱曲、オペレッタといった声楽作品が目立つが、ピアノやヴァイオリンといった器楽曲も得意としていたようである。ポリーヌの作品が収められた楽譜や CD もわずかながら出版されている。その中には、フレデリック・ショパン Frédéric Chopin (1810-49) のマズルカを歌曲に編曲したものも含まれる（楽譜や CD の情報は本稿では割愛する）。近年になって出版された年代順の作品表 *The Musical Works of Pauline Viardot* (WADDINGTON 2004) は作曲家としてのポリーヌを知る手掛かりとなっている。

ポリーヌの著した声楽教本は 2 種あり、ひとつは *Ecole classique de chant* (VIARDOT s. d.) というシリーズ名で、いろいろな歌曲やアリアの演奏における解釈が追記された楽譜の形で出版されている。もうひとつ、*An Hour of Study* (VIARDOT 1985) は、練習曲と注意点が記された声楽教科本で、パリ音楽院で採用されたこと以外情報がなく詳細は不明であるが、タイトルから *Une heure d'étude* (VIARDOT 1880) の英語訳と考えられる。

2.4 当時の新聞、雑誌における批評等

歌手としてのポリーヌを知る手掛かりとしては、パリの *Revue et Gazette Musicale de Paris* や *Revue des deux mondes*、ロンドンでは *The Athenaeum*、ライプツィヒでは *Allgemeine musikalische Zeitung* など当時の各地の新聞や雑誌が重要となってくる。ポリーヌに関する記事が掲載されている定期刊行物のタイトルについては *The Price of Genius* (FITZLYON 1964) の巻末に詳しく挙げられている。*Pauline Viardot-Garcia* (COFER 1988) では、*Revue et Gazette Musicale de Paris* を中心にポリーヌの演奏についての記事がまとめられており、ポリーヌの声や演技についてうかがい知ることができる。これらとは別に、例えば *A travers chants* (BERLIOZ 1971) のような、同時代の作曲家の手記にもポリーヌに関する記述が多く見いだされる。

2.5 学術論文など

近年、伝記や書簡集といった資料は増えてきたものの、個別のテーマを持ったポリーヌ研究は数少ないが、その中で“Gounod and his First Interpreter” (MARIX-SPIRE 1945) や“Pauline Viardot-Garcia as Berlioz's Counselor and Physician” (WADDINGTON 1973)、“Henry Chorley, Pauline Viardot and Turgenev” (WADDINGTON 1981) といった、ポリーヌと交流のあった音楽家や作家との関係について論じられたものが目立つ。“Berlioz's version of Gluck's *Orphée*”

(FAUQUET 1992) はベルリオーズ編グルック《オルフェオ》のエディション研究であるが、ポリーヌが編曲の段階から《オルフェオ》の復活上演にかなりのウエイトで携わっていたことが、編曲版の手稿の分析を通して明示されている。*Pauline Viardot-Garcia* (COFER 1988) はオペラ歌手、作曲家、教師としてのポリーヌの全体像を広く扱った学位論文で、ポリーヌの業績カタログのような印象を与えるが、まとまった資料の乏しい時期において、有用なガイダンスとなったであろう。

3. おわりに

以上のように、近年になってポリーヌに関する出版物が増え、ポリーヌの名を見聞きすることも多くなってきたとはいえ、彼女の多岐にわたる活躍にたいして、なされてきた研究は数少ない。人脈が広いだけに未整理の資料も多く残されていると思われ、意外なところから未だ“発見”されていない資料が見つかる可能性も否定できない。今後は、ポリーヌの足跡を丹念に辿り、再構成すると共に、ポリーヌ研究を通して19世紀音楽の本質を知る手掛かりが得られることが期待されよう。

参考文献

ALJA, Rachmanowa

1952 *Die Liebe eines Lebens—Iwan Turgenjew und Pauline Viardot*, Frauenfeld, Switzerland: Huber & Co AG Verlag.

BARBIER, Patrick

2009 *Pauline Viardot Biographie*, Paris: Grasset.

BARRY, Nicole

1990 *Pauline Viardot*, Paris: Flammarion.

BERLIOZ, Hector

1971 *A travers chants*, GUICHARD, Léon (ed.), Paris: Gründ. (Originally published: 1862, Paris: Michel Lévy frères.)

BORCHARD, Beatrix

2001 "Viardot, (Michelle Ferdinande) Pauline", SADIE, Stanley; TYRRELL, John (ed.), *The New Grove Dictionary of Music and Musicians (2nd ed.)*, London: Macmillan: 26:519-521.

COFER, Angela Faith

1988 *Pauline Viardot-Garcia: The influence of the performer on nineteenth-century opera*, D.M.A., University of Cincinnati.

CRAIG, D. Millar

1927 "Letters from Wagner to Madame Pauline Viardot", *The Musical Times*, 68(1008): 137-139.

FAUQUET, Joël-Marie

1992 "Berlioz's version of Gluck's *Ophée*", BLOOM, Peter (ed.) *Berlioz Studies*, New York: Cambridge University Press: 189-253.

FERRIS, George T.

2007 *Great Singers: Malibran To Materna*, White fish, Montana: Kessinger publishing. (Originally published: 1881, New York: D Appleton and Company.)

FITZLYON, April

1964 *The Price of Genius: a Biography of Pauline Viardot*, London: John Calder.

1980 "Viardot, (Michelle Ferdinande) Pauline", SADIE, Stanley; et al. (ed.), *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, London: Macmillan.

2003 日本語訳「ヴィアルド、(ミシェル・フェルディナンド・)ポリーヌ」『ニューグローヴ世界音楽大事典』伊藤、久恵; 内野、充子 (訳), 柴田、南雄 遠山、一行 (総監修), 東京: 講談社: 2: 292.

1992 "Viardot, (Michelle Ferdinande) Pauline", SADIE, Stanley(ed.), *The New Grove Dictionary of Opera*, London: Macmillan:4:981-982

FRIANG, Michèle

2008 *Pauline Viardot au miroir de sa correspondance*, Paris: Hermann Éditeurs.

GARCÍA, Manuel マヌエル, ガルシア

1894 *Hints on singing*, London: E. Ascherberg.

2003 日本語訳『ベルカント唱法のヒント』山内、すみえ; 今田、理枝 (訳), 東京: シンフォニア.

GRANJARD, Henri; et.al (ed.)

1972 *Lettres inédites de Tourguéniev à Pauline Viardot et à sa famille*, Lausanne: L'Age d'Homme.

HÉRITTE-VIARDOT, Loise

1977 *Memories and Adventures*, New York: Da Capo Press. (Originally published: 1913, London: Mills & Boon.)

KENDALL-DAVIES, Barbara

2003 *The Life and Work of Pauline Viardot Garcia, Vol.1: The Years of Fame 1836-1863*, Newcastle: Cambridge Scholars Press.

小林 緑

1999 「ポリーヌ・ヴィアルド—19世紀オペラ界のスーパースター」小林、緑 (編) 『女性作曲家列伝』 東京: 平凡社: 121-138.

LANGE- BRACHMANN, Ute; DRAHEIM, Joachim

1999 *Pauline Viardot in Baden-Baden und Karlsruhe*, Baden-Baden: Nomos.

MARIX-SPIRE, Thérèse

1945 "Gounod and his First Interpreter", *The Musical Quarterly*, 31(2):193-211, 299-317.

MARIX-SPIRE, Thérèse (ed.)

1959 *Lettres inédites de George Sand et de Pauline Viardot 1839-1849*, Paris: Nouvelles Éditions Latines.

MOLEVA, Nina

2008 *Prizrak Viardo, ili Nesostoyavsheesya shaste Ivana Turgeneva (Ghost Viardot, or non-luck Ivan Turgenev)*, Moskva: Algoritm.

PARKER, Roger (ed.) パーカー, ロジャー (編)

1994 *The Oxford Illustrated History of Opera*, Oxford: Oxford University Press.

1999 日本語訳『オックスフォードオペラ史』大崎, 滋生(監訳), 東京: 平凡社

PLEASANTS, Henry

1966 *The Great Singers*, New York: Simon and Schuster.

ROZANOV, Aleksandr Semenovich

1969 *Polina Viardo-Garcia*, Leningrad: Muzyka..

SCHOEN-RENÉ, Anna Eugénie

1941 *America's Musical Inheritance: Memories and Reminiscences*, New York: G.P. Putnem's Sons.

STEEN, Michael

2007 *Enchantress of Nations—Pauline Viardot: Soprano, Muse and Lover*, Thriplow, England: Icon Books.

STERNFELD, Frederick

1965 "Review: Pauline Viardot", *The Musical Times*, 106(1468):436-438.

VIARDOT, Paul

1910 *Souvenirs d'un artiste*, Paris: Librairie Fischbacher.

VIARDOT, Pauline

1880 *Une heure d'étude: exercices pour voix de femmes*, Paris: Heugel.

1915 English translation, "Pauline Viardot-Garcia to Julius Rietz—Letters of Friendship", Translated by BAKER, Theodore, *The Musical Quarterly* 1(3):350-380, 1(4):526-559, 2(1):32-60.

1985 *An Hour of Study, Vol. 1&2*, New York: Belwin Mills Publishing.

s. d. English translation, *Ecole classique de chant*, Anonymous (trans.), Paris: J. Hamelle.

WADDINGTON, Patrick

1973 "Pauline Viardot-Garcia as Berlioz's Counselor and Physician", *The Musical Quarterly* 59(3):382-398.

1981 “Henry Chorley, Pauline Viardot and Turgenev: a Musical and Literary Friendship”, *The Musical Quarterly* 67(2):165-192.

2004 *The Musical Works of Pauline Viardot-Garcia (1821-1910) : a chronological catalogue with an index of titles (2nd ed.)* , Pinehaven, New Zealand: Whirinaki Press.

みずこし みわ

お茶の水女子大学卒業、同大学院修了。現在、同大学院博士後期課程在学中。お茶の水女子大学非常勤講師。